

女子大学生における死のイメージ

Images of Death in Female University Student

増田 公男

Kimio MASUDA

【序 論】

世界人口は、2011年10月末で70億人を超えたが、日本の人口は1970年の調査開始以来初めて2010年の国勢調査で人口減が明確になった（2005年から2010年の間に約37万人の減少）。全体に占める65歳以上の人口、すなわち高齢化率も過去最高の23%に達した。国連人口基金（2011）の調査によれば、世界では60歳以上の人口が13%（8.9億人）であったが、2050年には2倍の26%になると予想されている（約24億人）。超高齢化社会の到来とともに高齢者の健康や生き甲斐の問題が「死」との関連で取り上げられ、医療、保健、福祉等の領域のみならず、1980年代以降心理学的な観点からも、高齢者が注目されるようになってきた。定年後また子どもたちが独立した後、老年期の延長によりいかに生き甲斐を持ち健康に過ごすかが大きな課題であろう。

他方、こうした傾向とは反対に、人生の途中で自らその後の人生を放棄するものも多く存在する。1998年以降、日本では自殺者が3万人を超える状況が今日まで続いている。自殺率（10万人当たりの数）は、2009年に一時的に該当しない年があったが、25を上回っている。国際比較でも、40を超えるロシアに続

いて高い。未成年者の自殺は、全体の2.4%（2009年）で決して多くはないが、学校問題が最も多く（29.0%）、健康問題（25.4%）、家庭問題（17.6%）と続いている。いじめを原因とする自殺は、1979年に初めて認定されて以降、現状維持ないしは減少傾向にあるが、毎年のように発生している。警察庁（2011）の統計によれば、19歳以下の自殺者は、全体の自殺者のなかでの構成比は2%以内であるが、実数は600名前後で推移しており無視できるような数字ではない。自殺に限らず、子どもたちが巻き込まれる事故や事件は枚挙にいとまがなく、子どもたちにとっても死は決して遠い存在ではない状況にある。

それでは、子どもたちは「死」に関してどのようなイメージを有しているのであろうか。たとえば、森本（2008）は、小学生（全学年）を対象に「生や死ということばから思い浮かぶもの」と「生と死ということばから受ける感じ」について、生と死を別々の項目として自由記述形式で回答を求めた。後者の「死のイメージ」に関してはKJ法を用いた分析（複数分類の可能性を含む）の結果、上位カテゴリーとして、「感情」、「人の活動」、「命・心・魂」、「自然・生き物」、「事柄・説明」、

「その他」をあげ、各上位カテゴリーの下に順に、3, 3, 1, 2, 8, 1の下位カテゴリーを示した。もっとも多くを占めた上位カテゴリーは、「感情」で65.2%に達し、そのうち97.7%までが「いやな感じ」という下位カテゴリーに属した。

死に関するイメージの研究には、形容詞対によるSD法による質問紙調査や自由記述による資料のKJ法を中心とした分析、面接法による分析など多岐にわたる手法が用いられ、発達的には幼児期からの高齢者まで幅広い研究報告がある。たとえば、松下ら(2007)は大学生を対象に「死」・「生」・「自己」のイメージに関する分析で、Death Anxiety Scale (DAS, Templer, 1970) の得点の高低との関係で、高群の特性として「こわい」、「著しい」、「暗い」、「大きい」などを見いだした。また、丹下(2002)は中高生から成人中期への「死」からの連想語に関する回答から7つに分類し、その一つである「イメージ」については、「死の比喩表現」として、別れ、消滅、自然への同化、停止、終わり始まり、解放、眠りなどに、「死の形容」として、静寂、暗黒のイメージ、静的、清、光、無、冷たい、美、色などにそれぞれ分類した。その結果、前者では別れ、停止、始めと終わりが全体の10を超え、後者では、無や暗黒のイメージが全体の各々9.1%、5.7%になっていた。総括的すれば発達的な傾向として以下の記述にまとめることができよう。丹下(2002)は「発達に伴い人々の『死』という語からの連想には方向性と領域の幅に関して変化が生じ、多面的な視点がとられるようになる」(p158)と述べている。

「死」をテーマとした研究は、社会的課題としての高齢化社会や自殺者の問題のみならず、教育の問題としても子どもたちに対して実施されることが多くなった。今回は、女子

大学生の死のイメージに関する記述を取り上げた。一般的に死には否定的なイメージがつかまとうが、肯定的なイメージ(藤井, 2003など)や両価的なイメージも確認されている(石坂, 2003など)。こうした事実は、教育実践の中で取り上げることによって、死という概念と対峙する機会を設けることの意義が示唆されているように思われる。

本報告では、女子大学生を対象として、死のイメージと死に関する意識との関係を明らかにするとともに、死のイメージをKJ法によって分析することを目的として計画された。

【方 法】

調査年月及び協力者—本質問紙調査は、2009年7月に女子大学生1, 2年生に対して実施し、246名から回答を得た。なお、平均年齢は18.7歳(SD=0.66)であった。また、後に示すKJ法の分析対象となったのは、自由記述欄への記載のあった202名であった。

質問紙—本調査で使用した質問紙への回答は、無記名式で実施した。付表に示した25項目(各4件法)からなる「死に関する意識」についての質問(田中, 2001)に対して、4件法で回答を求めた。また、自由記述による「死のイメージ」の記入内容をKJ法によって分析した。さらに、児童期までの動物や人との死別経験についても、選択肢と記述欄を設け回答を求めた。

【結果と考察】

1) 死のイメージ(肯定的・両価的・否定的)と死に関する意識について

自由記述で求めた「死に関するイメージ」について記述があったのは、202名で全体の82.1%であった。これらの記述が肯定的か、両価的か、否定的かを分類(イメージの肯定度)したところ、表1に示したように、明確

表1 学年別の「死」のイメージ

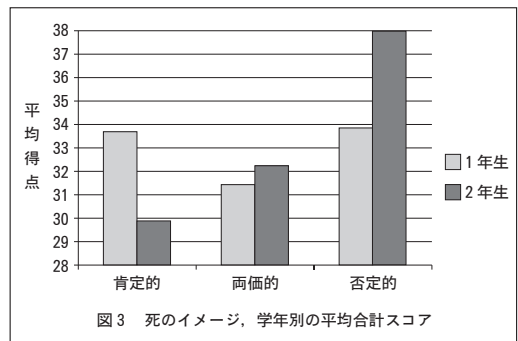
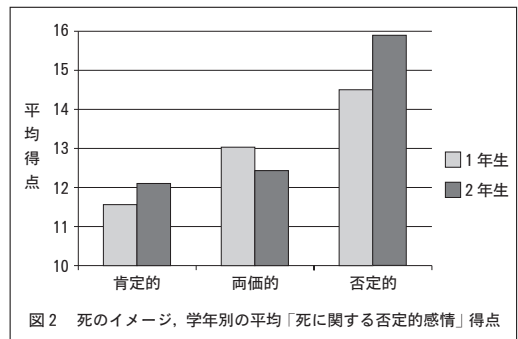
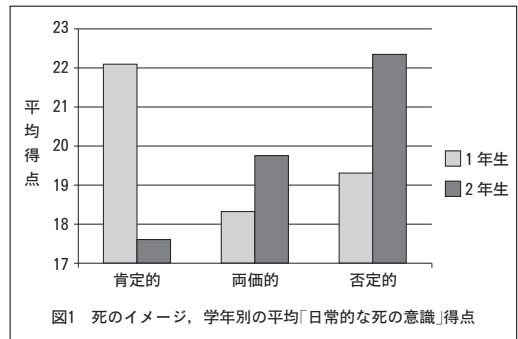
%	肯定的	両価的	否定的
1年生	17.6	33.3	50.0
2年生	15.6	40.6	43.8

な学年間の差は認められず、全体としては、順番に17.3%, 36.1%, 46.5%であり、半数近くが否定的で、肯定的イメージを有する者は20%に達しなかった。仲村(1994)によれば、面接法による調査で、死へのイメージは、発達的には児童期までは否定的(いやな感じ-こわい, 不気味など)で、小学校の低学年(68%)でピークを迎え、9歳以降減少するという。中間(両価的)イメージも、1/3を超える割合で既述の石坂ら(2003)と同様に確認された。また、上藺(1993)も死に対する(おもに否定的)感情反応は、児童期初期までは増加するが、その後減少するとしている。青年期以降については、死の不安に関して中年期にピークに達し、老年期に最も低下し逆U字型の関係にあるという(Gresserelら, 1987-1988)。

本研究では、田中(2001)の「死に関する意識」の質問紙を使用した。もとの研究が中高年を対象としているため、新たに本研究対象に対しての因子分析の結果から(増田, 2011), 「日常的な死の意識」因子(因子1の8項目)と「死に関する否定的感情」因子(因子2の6項目)および2つの因子の合計得点をもとに分析した。これらの因子ごとと合計得点について、死のイメージ度による差異を明らかにするために、死に関する意識の尺度について、因子ごとと合計スコアについて、分散分析を実施した。図1から3に、因子1, 因子2, 全体の合計スコアの順に平均値を掲載した。

その結果、まず、「日常的な死の意識」因子では、イメージと学年の交互作用が認められた($F=6.65, df=2/196, p<.01$)。これは、

1年生は肯定的な者が最も高く、2年生では否定的な者が最も高かったことによる。下位検定では、1年生、2年生ともにイメージ差が認められ、1年生では肯定的なイメージをもつものの方が得点が高く、2年生では否定的なイメージをもつものの方が高くなっていた(1年生- $F=3.08, df=2/196, p<.05$; 2年生- $F=5.80, df=2/196, p<.01$)。さらなる下位検定では、1年生では肯定的と両価的の間に差($p<.01$)が、2年生では否定的と両価的の間、両価的と肯定的の間に各々差異が認められた($p>.01$)。



つぎに「死に関する否定的感情」因子ではイメージの主効果が認められ ($F=12.50$, $df=2/196$, $p<.001$), 否定的イメージと両価的、肯定的の間に各々差が確認できた ($p<.001$)。また、1年生のイメージ差 ($F=4.03$, $df=2/196$, $p<.05$), 2年生のイメージ差 ($F=9.63$, $df=2/196$, $p<.001$) はともに有意で、1年生では否定的と両価的、2年生では否定的と両価的、否定的と肯定的で各々差が確認された (すべて $p<.01$)。

1年生では死のイメージが肯定的なもので「日常的な死の意識」が高く、2年生では否定的なものが低いという結果について、合理的な説明は困難であり、再検証が求められるであろう。「死に関する否定的感情」因子については、両学年とも同様の方向性を示しており、学年差は認められなかった。自由記述で否定的な記述をしたものが、感情面でも死に関して否定的な意識をもっていた。自由記述では必ずしも否定的な感情を発現させているわけではないものの (後述のように22%), 関連性が確認された。

最後に「日常的な死の意識」因子と「死に関する否定的感情」因子を合わせた合計スコアでは、イメージの主効果 ($F=8.97$, $df=2/196$, $p<.001$) とイメージと学年の交互作用が認められた ($F=4.48$, $df=2/196$, $p<.05$)。交互作用は、「日常的な死の意識」の因子ほど明確ではないが、1年生のうち肯定的なイメージをもつものの得点が、2年生のそれを大きく上回ったことによるもので、「日常的な死の意識」因子での効果が「死に関する否定的感情」因子で弱まったことが示されている。下位検定の結果、否定的イメージの学年差 ($F=8.91$, $df=1/196$, $p<.01$), 2年生のイメージ差が現れた ($F=11.78$, $df=2/196$, $p<.001$)。後者では、否定的と両価的、否定的と肯定的でそれぞれ差が確認された ($p<.01$)。

全体として、死についてのイメージの肯定、否定によって死への意識が異なることが示された。

2) KJ法による死のイメージの分析

自由記述による「死のイメージ」を記述させたところ、202名から全体で449項目の記述があり、平均2.23の記述カテゴリーがあった。

図4に示したようにこれらをKJ法によって分類した。全体として、死を終結ととらえ、その際特に感覚や意識がない死後の状態についての記述が一定数みられ、その対極ともいえる、その後の世界を想定するかといった死後の世界に関係した記述が中心的な軸になっていた。その際、対人関係に重点を置いたもの (死によって生じる他者との関係の消滅、離別の悲哀など) があった。また、死を意識することによって、生の大切さや生の充実を対比的に意識するといった記述とともに、臓器提供といった貢献や死に関する教育といった積極的な意味を見いだそうとするものもあった。他のカテゴリーとして、死によって引き起こされる感情については数多くみられた。また、自分や他人の死という具体的な死を想定してのイメージというより、概してネガティブな客観的な感情がめだった。さらに、死を受容するものや非常に曖昧な漠然としたイメージの記述や死を認識することを回避したり、拒否しようとする者も認められた。

それぞれの出現頻度の全体に占める比率は、「死後」に関係する宿命、終末、消滅といった項目が最も多く48.6%あり、死によって引き起こされる感情に関してが22.0%であった。これらに続いて、認識の回避や拒否が9.8%、対人関係上の別離が5.8%、死後の状態についてが4.0%となっていた。なお、献体や死の教育についての記述も少ないながら認められた (計4件, 0.9%)。

死に関するイメージは一般的には否定的で

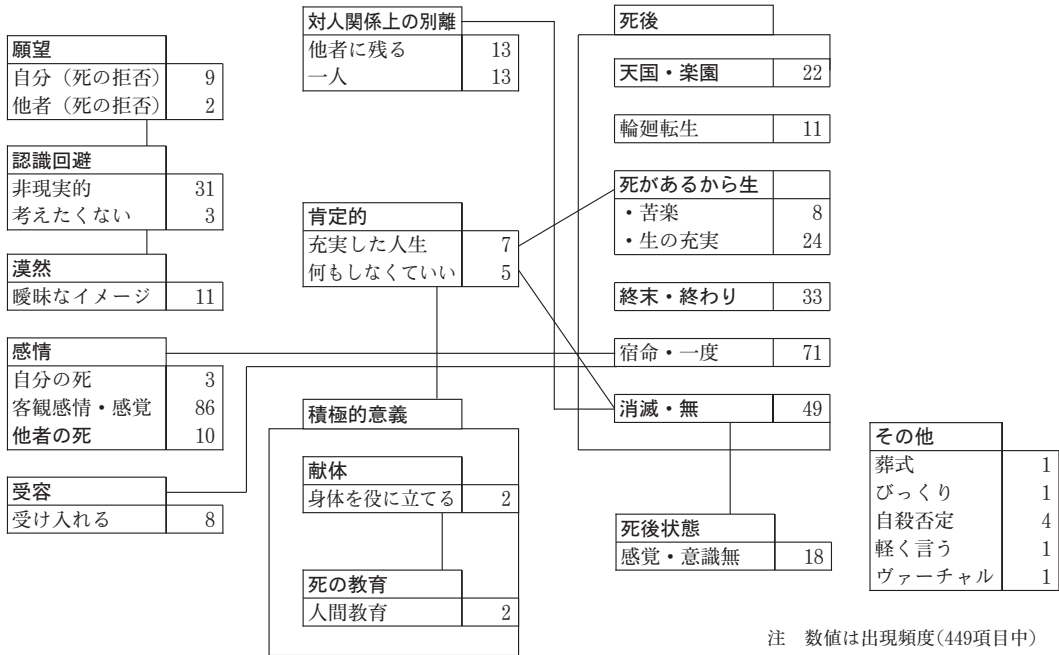


図4 死に関するイメージのKJ法による図式化

あり、「さびしい」、「こわい」が30%を超えており、老年期に近くなると受容傾向も認められるという(柏木, 1999)。幼児期から児童期では、「いやな感じ(恐い, 不気味など)」が減少傾向になった児童期の高学年でも45%と最も高くなっており、このころから本調査で現れた「生と死」すなわち生との対比での死や「死後の世界(天国, 地獄など)」などが確認された。ただ、こうしたイメージは、教員養成課程の学生への「生と死を考える教育」という死についての講演の視聴の前後でも変化するとされ(梶原ら, 2009)、固定的なものではなく、系統的な死への準備教育や死生観教育が効果をもたらすであろうことを予想させる。

3) 死別経験と死のイメージ(肯定度-肯定的・両価的・否定的)

児童期までの身近な人や動物との死別経験と死に対するイメージに関連がある可能性を予測し、 χ^2 検定を実施した(表2)。動物と

の死別経験のないものがあるものに比べて、肯定的なイメージの約2倍になっていたが、人との死別経験を含め全体での差異は、確認されなかった。

この結果は、死別経験の有無が、それだけでは意識上の死生観と関連を見いだせなかったという松下ら(2009)と同じような方向性を示していた。また、丹下(2004)による児童期までの態度には影響があるが、青年期以降では死別経験が単独では効果をもたないという結果とも符合する。他方、死別経験による遺族への影響を見いだした研究も数多く存在する(安藤ら, 2003など)。

死別経験は、各々個別的かつ主観的な経験

表2 死別経験と死のイメージの関係

	人との間		動物との間	
	%	有	%	有
否定的	19.3	27.2	20.2	25.3
両価的	14.4	21.8	16.2	20.7
肯定的	8.4	8.9	6.1	11.6

であり千差万別である。若死にか、老年期を向かえてからの死か、交通事故などによる突然の死かガンや不治の病で、ある程度死期が予測できるものであったかなど、死者の側の事情によって遺族への影響は異なる。また、遺族の年齢・性、性格や死者との関係性によっても異なる。こうした要素を考慮した検討をする必要がある、そのためには渡邊 (2004) のように、死別に対する態度の肯定度、死や死別後の関わり方の類型という死別経験の認知タイプを分類した上での分析なども有用な方法の一つであるとともに、被調査者にとっては大きな負担になる場合もあるかもしれないが、面接によるデータを加味したり、より詳細な質問項目を含める必要があるだろう。

【要 約】

本研究は、女子大学生の自由記述による「死のイメージ」を肯定的、両価的、否定的に分け、質問紙法によって得た「死への意識」尺度の得点がどのように異なるかを、学年の要因とともに検討した。その結果、因子2 (否定的感情) では、否定的であるほど高くなっており一貫性が認められた。つぎに死のイメージについて、KJ法により分類したところ、「死後に関する」カテゴリーが最も多く、「死によって引き起こされる感情」、「死の世界」「認識の回避や拒否」、「結果としての対人関係の消滅」などが続いた。死別経験と死のイメージ (肯定的・両価的・否定的) との関係は見られなかった。

【引用文献】

安藤清志・松井 豊・福岡欽治 2003 近親者との死別による心理的反応—予備的検討 東洋大学社会学部紀要 41, 2, 63-83
 藤井美和 2003 大学生のもつ「死」のイメージ：テキストマイニングによる分析 関西学院大学社会学部紀要 95, 145-155.

Gresserel, G., Wong, P. T. P., & Reker, G. T. 1987-88. Death attitudes across the lifespan: The development and validation of the Death Attitude Profile (DAP). Omega: Journal of Death and Dying, 18, 113-124.
 石坂昌子 2003 死の意味づけの質的検討と量的検討—死に対する心理の理解(1)— 日本心理学会第67回大会, 289
 梶原京子・新山悦子・忠津佐和代・望月悦子・福井正康 2009 大学生の生と死に対するイメージの検討 全国看護管理・教育・地域ケアシステム学会看護・保健科学研究誌, 9, 1, 115-124.
 上蘭恒太郎 1993 子どもの死の意識における感情表出年齢と道徳教育 長崎大学教育学部教育科学研究報告 51, 15-25.
 柏木哲夫 1999 死とストレス 現代のエスプリ別冊 現代的ストレスの課題と対応 至文堂 227-237.
 警察庁生活安全局生活安全企画課 2011 平成22年度中における自殺の概要資料
 国連人口基金 2011 世界人口白書 阿藤 誠 (日本語版監修) 家族計画国際協力財団
 増田公男 2011 女子大学生における死の意識に関する調査 金城学院大学論集 人文科学編 7.2, 93-101.
 松下姫歌・尾方 綾 2007 青年期における死の不安と「死」・「生」・「自己」のイメージ 広島大学心理学研究 7, 325-337.
 松下姫歌・尾方 綾 2009 死別体験と「死」のイメージおよび死への態度との関連 広島大学大学院教育学研究科紀要 58, 159-168.
 森本朋佳 2008 小学生が持つ生や死についてのイメージに関する一考察—自由記述式の質問紙調査に基づいて— 鹿児島純心女子短期大学研究紀要 38, 135-146.
 仲村照子 1994 子どもの死の概念 発達心理学研究 5, 61-71.
 田中愛子・後藤政幸・岩本 晋・李 惠英・杉洋子・金山正子・奥田昌之・國次一郎・芳原達也 2001 青年期および壮年期の「死に関する意識」の比較研究 山口医学 50, 4, 697-704.
 丹下智香子 2002 「死」からの連想語のKJ法による分類—死生観の構造の検討 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 49, 157-168.

丹下智香子 2004 青年前期・中期における死に対する態度の変化 発達心理学研究 15, 1, 65-76.

渡邊照美 2004 死別経験者の死別に対する認知と関連要因の検討 広島大学大学院教育学研究紀要 第二部 53, 411-420.

Templer, D.I. 1970 The construction and validation of a death anxiety scale. Journal of General Psychology, 82, 165-177.

付表 「死に関する意識」の質問項目

因子名	項目順	質問項目	逆転項目
日常的な死の意識 (因子1)	7	私は自分の死について空想することがある。	
	1	私は自分自身の死について考えることがある。	
	2	私は若死について考えることがある。	
	3	私は寝る前に死について考えることがある。	
	22	私は交通事故で死ぬかもしれないと考えることがある。	
	5	私が死んだとき、身内の人がどう振る舞い、どう感じるかを考えることがある。	
	6	私は病気するとき、死について考えることがある。	
	21	私は大切な人の死について考えることがある。	
死に関する感情 (因子2)	11	私は自分が死ぬと考えると不安になる。	
	15	私は死ぬことが恐ろしい。	
	20	私は自分が死ぬと考えると憂鬱になる。	
	16	私は人生が短いことを考えると、気持ちが動揺してくる。	
	9	私は周囲の人々以上に、死についての不安が大きい。	
	14	私は自分の死を、悪夢のような苦しみと思っている。	
	4	私は死ぬ時期がわかったら、それまでの時間をどのように振る舞うか考えることがある。	
	17	私は死について考えることが、時間の無駄だと思う。	※
	8	私は人が年をとったとき、死について不安になると思う。	※
	23	私の考え方は、楽観的である。	※
	12	私にとって大切な人の死を考えると不安になる。	
	10	私は死ぬことはほとんど気にしない。	※
	25	死後の世界があるかどうか、私は心配である。	
	13	私は将来必ず死ぬと思っても、自分の生き方を変えようとは思わない。	※
	18	私は豊かな人生を過ごせたら、死ぬことはそう悲しいことではないと思う。	※
	24	多くの人が葬式など、人の死に直面すると不安になるが、私は動揺しない。	※
	19	私は死後の世界があってほしいと思う。	